



レトロ
郵便局
物語

川崎ゆきお

「私の時代は終わったなあ」

石田は久しぶりに大きな町に出て、そう呟いた。

「あの映画館もなくなっている。喫茶店も。駅も別の建物で、すっかり様変わりした。

石田は駅近くにある大きな郵便局の跡地を見ている。

「ここにあったのが嘘のようだ」

一刻も早く郵便物を出さないといけないとき、ここに出しに来たのだ。そして、郵便局の地下に食堂があり、その入り口が地下街の秘密のドアから入れることを知っていた。関係者以外立ち入り禁止となっているが、郵便局の地下と地下街を繋げる通路なのだ。中に秘密の部屋が隠されているわけではなく、郵便局の食堂に出る。

「あの穴はどうなったのだろうかなあ」

と、呟くが、今はもう郵便局への用事はない。

そこへ、坊主頭の入道が現れた。妖怪ではない。大きな男で着流しだ。足元を見ると草履を履いている。こういうスタイルで歩けるのは大きな町に限られるだろう。または極狭い範囲の町内だけ。

「あなたの物語は終わったようですね。しかし、物語そのものも終わっているかもしれん」

その日、石田は田舎紳士のような服装をしていた。石田はそれを自覚していたので、この入道殿はきっと詐欺師だろうと睨みを付けた。

「町には物語がある。その物語はあなたが織りなしたものだ。もう関わりがなくなれば、遠い昔の物語になる」

「郵便局もですか」

「ああ、この古いレトロな建物には物語があった。しかし取り壊されると物語も消える。まあ、ライブラリーに入るのだろうが、それを取り出す術は滅多にない。もう既に忘れ去られた物語になる。省みる人が少ないとな」

「私は、この郵便局へ速達を出しによく来ました」

「それはあなたの物語ですな」

「そうです」

「郵便局物語に付いているエピソードの一つじゃ」

「ここは空襲でも燃えなかったのです」

「まあ、不便になるから、狙わなかったのじゃろ」

「不便」

「占領後のことを考えてな。鉄道もそうじゃ」

「では、空襲を免れたことも、この郵便局物語のエピソードになりますかな」

「ああ、なるのう」

「それで、あなたは」

「何か」

「だから、あなたは何ですか」

「ああ、わしは語り部じゃ。物語のな」

「琵琶法師のようなものですか」

「琵琶など持ってはおらん」

「あ、見れば分かります」

入道は手ぶらだ。

「それで、何か私に用事ですか」

「語れる相手を見付けたので、語っているだけ」

「物語をですか」

「その物語なのだが、それもまた今はもう必要ではないのかもしれん」

「どういうことですか。思い出話とかは必要でしょ」

「わしが語りたいのは町の物語なのじゃ」

「はあ」

「この界隈の物語を、今読んでおる」

「本ですか」

「いや、観察しながらな」

「はあ」

「まあ、よい。物語など万とある。万では効かぬかもしれん。人の数ほど物語がある。同じ町でも人の数ほど町物語がある」

「難しそうな話ですねえ」

入道はにこやかな顔をする。

石田は、この詐欺師が次に何か言い出すのではないかと、警戒する。

「そして、分かったことがある。いや感じたことかな」

「はい」

「物語を語りすぎたことを最近思う」

「あ、はい」

何処から詐欺を始めるのか、石田はまだ警戒している。

「物語は捏造される」

「本当の物語は別のところに隠されていると」

この別のところへアクセスするには、この価格が必要という詐欺ではないかと思い、石田は敢えて誘った。

「それが見付からぬのでウロウロしておる。真の物語とは何かを探してな」

石田は、そういうフィクションを聞いた覚えがある。詩だろうか。

「この郵便局の地下に食堂があり、その通路があることを知っておるか」

「知ってます」

「ほう、驚いた」

「何度か入ったことがあります」

「うーむ、大ネタを噛ましたのに、知っておられたか」

「はい」

「では、退散、退散」

入道は去って行った。

その物語を知っている人に話しても、受けないと思ったのだろう。

しかし石田は、その食堂の思い出話をもっとやりたかった。

了